

安政
新刻 隅田川向島繪圖

墨東向島の道

Bokutou Mukoujima no Michi
鈴木都宣



口絵省略

本編はダウンロード時間短縮のため省略版でお届けしています。
途中省略なしの完全版をご希望の方は製品版をご「購読」ください。

『Boon-gate』のPDF作品を ご覧いただく前に…

操作について

- 作品の多くは「もくじ」のページで、進みたいページの項目を押せば、そのページまでジャンプし、また、ジャンプしたページのタイトルを押せば、目次のページに戻るよう設定しております。
- 直前に開いていたページに戻るには、画面上の「◀」ボタンで、直前に開いていたページに戻ります。

読み方いろいろ

- 通常は画面の「倍率」が100%前後になっていますが、「倍率」を150%まで高めると文字が読みやすい大きさになります。
- 通常は「見開きページ」で設定されていますが、「単一ページ」にすると読みやすく感じます。
- 読み進めるときは、「十字キー」を使用すると手軽です。
- 「サムネイル機能」を使用して読み進めると、2～3頁からとばし読みするのに便利です。
- 頁を「回転」させることが可能です。地図などを拡大して見るときに便利です。

http://www.bungeisha.com/PDF_is/05-top1.html でPDF作品についての説明を致しております。ご参照ください。

はしがき

江戸時代、天下の名勝の地と詠うたわれた向島の姿は今ももう無い。

かくのごとく見事に向島の景勝を失わせたものは何なのか。

まことに無念やるかたない思いである。

どうしてそうなったのか……。やはり明治維新後の時代の流れというものがあつたという以外ないようだ。

明治近代国家の建設！それは殖産振興の名のもと欧米に追いつき追い越せの時代、国力増強は国家目標であつた。生産第一、工場立地優先。国際競争力をつけるだけに急で、内政問題である都市問題は二の次ぎであつた。都心部には開放した広大な武家地が残り、国家機関はそれを利用することで足りた。

それでも近代都市としての基盤を作るため、道路の拡張、上下水道の整備、鉄道・港湾など近代国家の体制作りに励んだ。銀座煉瓦街や官庁街計画はその産物である。江戸の巨大な城下町の遺産があつたため、明治政府は都市を造るといふ発想は少なく、小規模な都市改造で当座間に合わせた。

明治二十一年の市区改正条例も市街地中心周辺の基盤整備が主で、軍備拡張が優先された予算削減で思うように進捗しなかった。わずかに道路拡張・上水道設備設置・日比谷公園の建設程度で終わった。

しかし、明治後期になると市区改正の道路拡張によって、路面電車や郊外電車という交通機関が登場したり市民生活の行動範囲が広がりをみせた。その変化は更なる都市改造の必要性を促した。その頃、後藤新平が登場し、大正八年に都市計画法と市街地建築物法が公布された。その法案を成立審議のなかで当時の大蔵省の反対により財源が大幅に削減され骨抜きにされた。しかもその地形図測量の段階で、大正十二年（1923）の関東大震災が発生する。

災害復旧のお陰で、帝都復興計画の大事業が動き出し、焼失区域の大規模な区画整理が実施された。現在の東京の市街地は、空襲による戦災後の復興計画が挫折しているので、この帝都復興時に行われた開発整備以上出ていないのが現状である。

そんな時代のなかで、向島の場合はどうであったのか。

周辺郊外地であった向島は帝都復興計画でも区域外であったため何の整備も手当ても受けない。しかし既に、明治時代から近代工業化を目指す波が近郊地帯の向島にも及んでいた。水運と安い土地。向島は工業立地に適合していた。景観を保存する発想・余裕など微塵もない明治・大正の産業拡張の忙しい時代。向島はただ工場向きというだけの地になっていた。大・中

の工場が進出し働く人の建物も建ち並びはじめた。

関東大震災後は被害も少なく、計画区域外であった向島には焼け跡の整地を待つのももどかしく、震災前にも増して大中小の工場、下請けの町工場などが殺到した。建築規制もなく、田んぼ・畑地、空いている土地を見つけては侵食するように建ち並んだ。

職工さん達の棟割長屋・借家・アパート、それに商店も、道路を造って建てるなら良い方で、狭い路地、行き止まりの土地にも建てた。田園地帯は忽ちにして無秩序な不良住宅（都市計画者側のコトバを借りれば）の密集地帯に変貌した。今の向島の原型はこうして形成された。

帝都復興事業によって市街地整備が一段落した昭和二年に都市計画街路網が決定した。これは東京郊外部の人口が震災後三倍に増加して、都市中心部との交通網の整備が必要になったこと、郊外新市街地のスプロール化（無秩序な宅地化）の防止を目的にしていた。

昭和七年十月、隣接する五郡八十二町村が東京市に合併。それに先駆けて発足した都市計画道路網設計があった。遅れ馳せながらこれが始めて向島にも適用されたわけである。

だが、ほとんど出来あがっていた向島の町を動かすのは大変だった。そこで線引きで明治通り、水戸街道を貫通させた。その後、昭和十年前後に押上通りなど中規模の道路が数本開通した。それが今の向島の町並みである。

東京の近代化に貢献したが、向島の失ったものは大きかった。

時代がそういう時代だったから……。東京の都市計画にも問題点があったから……。と言っても市街地膨張の勢いはどうしようもない時代の流れであり、それが向島を変えたのである。

昭和四年。そんな時に私は生まれた。

だから正直言つて向島という街はきれいではなかった。細い道や曲がつた道、狭い路地がやたらと多い。子供の頃はドブが多く、路地も土だったので雨の時はぬかるみ水溜りになった。今ではドブは暗渠になり、路地も舗装され、いくらかましになったが……。

そういうところだったので、軒と軒がくつついた小さい家、長屋、商店、町工場などがゴチャゴチャ建ち並んでいた。

大通りといえ、明治通り、水戸街道だけであった。当時は改正道路と呼んで新しい道路というイメージがあり、コンクリート舗装の広い道が真直ぐ伸びて、それに歩道も付いていたので恰好がよかった。子ども心にも近代を感じた。

遊びに使っていた路地や狭く曲がりくねった道は、道には違いないが、遊びの場の延長みたいな感覚で、道というより、かくれんぼや探偵ごっこで隠れる家の軒かげを探す近道・遊び場の延長であった。

ときどき祖母や叔父などから聞く、「向島は綺麗なところだったんだ」とか、「隅田川では白魚が釣れたんだよ」という言葉は俄かには信じられなかった。そういえば、近くにはまだ自然

の名残りはあった。いなごやとんぼ釣りをした原っぱがまだあった。チャンバラごっこをした築山のあるお屋敷の庭跡や土手から水神さま（隅田川神社）へ行く両側には青藻の繁った汚れた水辺や池の道があったが……。

ここでまた思い出したことがある。昭和二十年八月十五日、あの夏の暑い敗戦後のこと、私は思いもかけない現象に出会っている。それまでは黒く汚れた隅田川の流れが、澄みきって綺麗な水に変っている。ほんの一時期——いつまで続いたのかはつきり覚えていないが——、隅田川が昔の姿を見せたのである。荒川、入間川、利根川等の源流が隅田川に緑の水を再び戻してくれた。何だか今考えると幻でも見たのか、それとも神の啓示を与えられたのか、とさえ思える経験であった。工場や民家も空襲で焼かれて廃水がなくなったからでもあるが、〃国敗れて山河あり〃とは正にこのことである。隅田川はこんなに綺麗だったのかという実感を初めて味あわせてもらった。

子ども達は早速隅田川で泳ぎはじめた。危険といえど危険だが、子ども達は自然の気持ちよい水の中で思う存分自由に遊んだ。当時隅田川で泳いだ悪童たちは、今でもあの時の大いなる遊びの感触を忘れ難く思い出しは語り草にしている。

○ ○ ○
子どもの頃、自分の住んでいる向島の町は好きでなかった。よそ行きを着てたまに連れてい

かれるデパートのある銀座や日本橋、浅草の盛り場、ビルの街にあこがれた。

しかし、ある時、多分向島の道を歩いているときに、ある考えがふと頭に浮かんだ。

——向島に路地や曲があった道が多いのは、かつて向島が農村であった時代の名残りだ。田んぼや畑の畦道が元になっているからだ。道路は造ったが区画整理はされてない向島。明治通りや水戸街道のことをよく改正道路と言っていた。明治通り、水戸街道は人工道だ。大正道路もそうだ。新しい道だ。古い道と新しい道が混在している。これは向島の街が出来あがっていく形成過程の姿をそのまま残している。(言い方を換えれば、未完のままと言ってもよい状態を止めている)向島は変わったところだな、と思った。

その後、調べるといふほどの気持ちはなかったが、興味を感じて、ときには地図などを見て過ごしていた。古い曲線状の道と新しい直線道が混在している向島。だんだん向島の道に対する関心は昂じたようだ。向島の道に対する気持ちは発酵するように視点も変わってきた。

向島は人の手によって大きな町並み造成をしたとか区画整理をした歴史はない。向島の道もまた昔の人が自然に生活しているうちに出来た道である。

そんなときに平成六年に、墨田区教育委員会主催の郷土史講座が開講したので参加した。

そこで荒川放水路ができる前の地図をみせられた。向島の道のなかには葛飾区の堀切から下千葉・綾瀬を経て陸前浜街道で松戸・水戸へ行く道がある。中川を渡って江戸川区平井聖天様

への宗教道。さらに奈良時代、わが国最初の律令大国家が造った下総市川国府台から木更津へ行く古代官道・東海道もあることを知った。曳舟川や中居堀の道。地藏坂通りの成立ち等々、新しい知識を得た。

計画的に一直線に延びた幹線道路は新しい道である。向島地区に明治道路、水戸街道など大通りが出来たのは昭和七、八年頃である。明治通りは予定環状道路として、水戸街道は幹線計画道路として、帝都復興事業が終わった後の課題処理として昭和二年決定の東京「都市計画街路網」によって昭和になって出来た道だ。

そこに斜めに交差していた曲がった道は昔の道である。明治道路や水戸街道が昔の道を切ってしまったのだ。180度考えが変わった。

東京の他の区をみても、向島のような例は少ないようである。荒川区の都電荒川線（もと日電）沿線や北区の王子周辺、足立区南部北千住・五反野・本木周辺は向島と似通った所もあるが……。江戸の切り絵図が使える赤坂地区などの例はあるにしても、江戸時代の町作りの産物である。また、明治維新後区画整理された街、関東大震災後の都市改造の手が大なり小なり入った街もある。或いは、葛飾区・江戸川区などの戦後に開拓された周辺地区は田畑を区画整理して町並みを作った例が多い。

向島はそうではない。向島の町は、古代・中世までもさかのぼって寺島村・隅田村といわれ

た時代から人工的な町作りは一度もない。このことは江戸図・江戸郊外図を見てもわかる。また明治の近代図法で作った東京図を見ても江戸図の道筋がそのまま残っている。

向島の道は古代から現代にいたるまで残り続けて、生活道として立派に使われてきた。それほど貴重な文化財は唯一無比またとない。今しつかり保存しないと次の世代・未来へと引き継ぐものを失なってしまう。昔向島に住んでいた人々の心を伝えるものを残すことが今いる私たちの仕事でなくてはならないと考えた。

向島の道を書いていくうちにだんだん解かってきたこともあった。現在の向島の街が、どのような過程で出来あがってきたのか、それがはっきりしてきたことである。ゴミゴミした街もくねくね曲がっている道もちゃんとした理由があつてのことである。荒川放水路の土手下には、どうしてこんな所に何で道があるのだ、と思うのがある。でも元を糾ただせば、野菜を生産するための畦道であつたり、溝川（用水路）が道に変化したものであつたり、境界道であつたりする。ちゃんと存在の理由、存在価値があつたことがわかる。綺麗か不整備かという価値観ではなく、人工の道か、自然に出来た道かで考えると理解できる。そういう眼で向島の道と町を見ていくと考えも変る。

向島の道について書き残しておくことは意味のないことでもない。誰かが読んでくれればいくらからでも郷土の理解に役立つと思ひ、「向島法人会だより」の頁ふさぎに書き続け、連載して

もらった駄文を冊子にまとめることにした。

なお、「向島の道」と書いた向島は、旧向島区の地域と旧本所区でも北十間川沿岸道及び以北（向島寄り）の牛島も含んでいる。古い地名の牛島に含まれる須崎・小梅・中之郷・押上各村と請地村は土地柄から言って向島地区に属していたが、明治二十一年（1888）に公布された市制町村制のとき本所区に編入された経緯がある。

目次

はしがき 3

- 1、旧向島区と旧本所区の違い 15
- 2、昔から残る道―薬師道・裏薬師道 27
- 3、古代東海道の官道（下総街道・立石道）と隅田宿 37
- 4、下の道 45
- 5、曳舟川通り 61
- 6、平井道と平井聖天様 75
- 7、川の名残りの残る道 87
- 8、川が造った道 97

- 9、地蔵坂通り 109
- 10、墨堤通り 123
- 11、昔の道と新しい道 159
- 12、大正道路 175
- 13、鐘ヶ淵通り 191
- 14、虎橋通り 203
- 15、水戸街道と明治通り 217
- 16、十間橋通り他
花みずき通り、中居堀通り、曳舟たから通り、押上通り、宮田通り、八広中央通り等 229

あとがき 251

参考文献一覧 255

1 旧向島区と旧本所区の違い

墨田区の地図をみると、北部の旧向島区と南部の旧本所区の地域では町並と街路の様子がはつきりと違っている。今は同じ区内の両地区ではあるが、もとは本所区と向島区。歴史的にみれば土地の誕生の経緯が全然違うのである。

墨田区は、隅田川の北部上流部から下流部にかけて徐々に土地が出来上がってきた。地理的に言えば北の隅田、寺島から、須崎本所へと陸地化が進んでいったことが最近の歴史考古学・歴史地理学の研究でも立証されている。

隅田、寺島、吾孀（大畑村）を抱える旧向島区は遙か千年以上も前の古代、中世の時代から歴史の上に出てくる古い土地である。承和二年（835年）の『太政官符（大化改新頃の律令国家の公文書）』に、『住田宿（隅田宿）に渡船が二艘あつたがこれを更に二艘ふやして四艘にする。』という記述が見える。ここに初めて墨田の地が歴史の場に登場。スミダ、スンダ（スムダ）或いはスタという名前で、安房・上総・下総・武蔵、更に遠く奥州への連結点ともなった住田川（隅田川）の重要な渡船場であつたことがわかる。

今、隅田川神社付近の地点であるが、この隣接する場所に梅若丸伝説で有名な木母寺がある。このように古く由緒ある土地柄なのである。

それに対して、本所の街ができるきっかけは、江戸時代最大級の大火、四代将軍家綱の明暦三年（1657年）に起きたかの有名な振り袖火事である。一月十八日午後、本郷本妙寺の施

餓鬼^{がき}に焼いた振袖が空に舞いあがり本堂に燃え移り、折からの北西の強風に煽られ江戸の市中は二昼夜にわたりほとんど焼き尽くされた。江戸城天守閣も焼失した。死者は十万人とも言われている。幕府は当時しだいに不足しがちな市街地の造成や火除地を求めて、対岸の当時はまだ湿地帯の本所の地を目をつけた。徳川氏が江戸に幕府を構えた当初は防御のために橋も架けずにわざと放っておいた沼地の多い場所である。本所築地奉行を設置し、今日言うところの大プロジェクトを組んで開発をはじめた。ほとんどが低湿地や荒地であった本所の地は白いキヤンパスの様なもの。豎川、横川など掘割を掘って、水はけを良くしたり埋立地を整備したりして、碁盤の目のように整然とした立派な街並みと道路を作った。外濠として戦略的意義を考える必要性も無くなりつつあった隅田川に両国橋を創架して大江戸再建を計った。それが完成して武家屋敷、豎川沿いに僅かの町屋が本所に移転しはじまるのが四年後の寛文元年（1661）である。

墨田区は北部の方から漸次陸地化されて開けていったので最北端の隅田、寺島あたりはもう既に古い村落や田畑などが散在し、人々も定住していた。既に思い切った開発ができなかった。本所地区でも中世戦国期、小田原北條氏「小田原衆所領役帳」（軍役を賦課するため家臣の所領高を表記したもの）に牛島四ヶ村と見える牛島周辺の須崎・小梅・中之郷・原庭・亀沢は古い地域なので土地区画が十分に行き届いていない。地境^{じまかい}や道路が曲がりくねって複雑なのは人工

的な区画計画の手が加えられていない証拠である。

明暦の大火後、幕府は江戸市街復興のため正確な地図の必要性を痛感し、当時の西洋流測量術を使って地図を作成した。寛文十年（1670）に刊行した『寛文江戸図』である。この実測図をみると、開拓された新市街地・本所地区と、自然発生的村落・向島地区との相違が歴然として現れている。

明治維新後、日本は近代化工業社会への移行のため思いきった政策を実行した。江戸は東京になり朝令暮改とも言うべき目まぐるしいほどの制度や行政区画の変更があった。

明治十一年（1878）に郡区町村編成法が公布され、江戸の朱印引内（市街地）であった本所地域は本所区に、郷村地であった向島地域は南葛飾郡に属した。明治二十一年（1888）市制町村制公布に伴って、須崎・小梅・中之郷・請地・押上・柳島の南葛飾郡6村が本所区に編入された。

明治後半期の日清・日露の戦争、第一次世界大戦後の好・不況景気もあった。

大正十二年（1923）の関東大震災後、周辺郡部の人口増加もあり東京市域拡張の気運が高まり、昭和七年（1931）に新しく二十区が設置されたとき、南葛飾区郡の隅田村・寺島村・吾嬬村を合わせて向島区が誕生した。

その頃の時勢は昭和初期の大恐慌、軍国主義の台頭、大国化めざしての戦時体制の強化の時

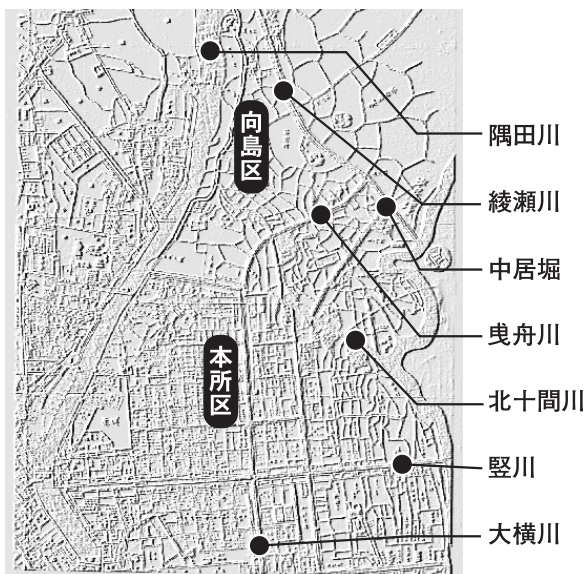
代だった。そして東京大空襲戦災などを経て、結局は、昭和二十年遂に敗戦をむかえた。

戦後の復興期、昭和二十二年三月十五日に本所区と向島区が統合し墨田区が誕生した。しかし、本所区には関東大震災後多少の区画整理があったが向島区には手が届かず、街並の輪郭は江戸時代の原形が受け継がれ、『寛文江戸図』にあった町並みは依然として変化が無かった。

区画整理事業は相当なエネルギーが必要である。明治以後、東京市街地中心部周辺の都市計画・都市改造（東京市区改正条例）が財政難のためほとんど縮小されてきた歩みをみてもわかる。大正八年公布の都市計画法も実質的な進展を見ぬうちに関東大震災が起った。関東大震災後の帝都復興計画のときにも向島地区は区画内には含まれていなかった。当時の工場進出と人口増加による過密家屋建築ブームが起きたにもかかわらず、周辺地区の向島区はまるで傘の外、区画開発の「ク」の字もなく勿論予算はまわらず、何の手当てもない状態で放っておかれた。

ようやく昭和に入り向島地区にも帝都復興事業終了後に引続き始まった系統的道路網整備計画の一部に入った。環状道路・明治通りと幹線放射道路・水戸街道の二本の幹線動脈道路が開通した。

既に、民間の手になる大正道路（大正四年新設）はあったが、道路の小規模な新設や改装などの機運が動き出した。鐘ヶ淵通り、墨堤通りなどの補助道路や、曳舟川通り、中居堀通り、その他向島の道も昭和十年前後になってようやく近代化の歩を進めた。



北部の向島地区は近郊農村地帯、南部の本所地域は
整然と区画整理されている。

このように向島の開発は都市計画という見地から見ると、ただ道路を作るだけという手法である程度の改善をみた。

しかし私は同時に、大規模な開発の手が入らなかったために、それがかえって良い面もあったと思っている。というのは、経済一辺倒の開発主義の時代に都市計画が行われたら、どうしても能率主義一点ばりの区画整理で四角い道路が交差する味も素っ気もない街が出来てしまうからである。昔の道も町並みも考えないで……。地元の歴史は消されてしまいかねないからである。

今では環境を配慮するとか郷土の文化を大事にするという考え方が出てきてい

る。ただ造ればよいという時代ではない。都市計画・土地改革があったとしても昭和時代までのような役所主導の手法は許されず、住民参加が欠かせないだろう。

いずれにせよ、古代から連綿と続いてきた向島の道が幸いにも今でも消えずに残った。向島地域にしかない固有の貴重な歴史遺産が無くならず済んだことはなによりであった。

では、その点について古い向島の道を二、三とり上げながら少し述べてみたい。

実は、東向島と八広（寺島町と吾嬬町）にかけて、昔の「薬師道」の道筋が今もなおそのまま残っている。江戸時代庶民信仰で栄えた「木下川薬師」への道である。その道筋を案内してみるのが、昔は田んぼの農道を利用したと思われるところもあって、今は建物が建てこんでいるその道を追うのはなかなかややこしい。少し冗長になるがお許しを願いたい。

御上り場（徳川將軍鷹狩りの際の船着き場）があつた平作堀の墨堤地藏坂から百花園（元旗本多賀氏の陣屋跡地）の前を通つて、東武線の東向島駅の横を過ぎて向島消防署前の国道6号線（水戸街道）を越し、ヤマニ酒店横の道に入る。鈴和二ツトに突当たら角を右折し、左に廻りこむように曳舟川通りまでは真っ直ぐに行く。ここには薬師橋が架つていたが、今は信号のある東向島六・八広一交差点。そこを渡つて先の道に入る。道の両側はしばらく商店街が続く。これは昭和前半期京成電車の向島駅があつたためである。その京成押上線の踏切を越えて八広新中通りを八広中央通りまで道成りに行く。八広中央通りに出ると、八広中央通りのすぐ

後ろに並行して薬師道が左方向へ少し残っている。並行している二つの道の間は植え込みになっ
ていて交番と墨田区の文化財・江戸時代大畑村講中が建立した「やくしみちの道標」がある。
いまは道標正面が中央通りに向けて立っているのは止むを得ないか。すぐ薬師道は八広中央通
りに吸収されてしまう。しかし八広四・五交差点の所で右折する道は再び薬師道になる。左に
廻りこむように宇田川豊次郎宅の手前・八広あづま公園の方向へ行く。木屋酒店角を右折し、
片山はなや惣菜屋で今度は左折、花みずき通りまで出る。左にファミリーマートのある八広六
交差点を越し加藤病院を通り過ぎ一軒先で右折、五差路の左斜め先の道は薬師道である。あと
は八広六丁目四ツ木の土手まで行く。その道は丁度土手の所で中居堀通りへ入っていたが、今
は土手であえなく遮られてしまう。「木下川薬師」も残念ながら荒川放水路の中に没して今は無
い（葛飾区中川際に移転）。江戸庶民の信仰を集めた有名な寺社ただだけに大勢の人が詰めか
け、その道筋は大変賑わった。いまでもファミリーマートのある商店街の道筋のところどころ
に古い店が残り、さすがにという感じを起こさせる。以上の通りと言うところだが、大判の墨
田区区分地図でも見て確かめてもらいたい。

また、中世の初め（1180年）源頼朝が相模国石橋山で平家討伐の旗揚げをしたが一度は
失敗し安房に逃れた。しばらくして、再挙を期して数万の軍勢を率いて安房から上総、下総市
川を経て江戸へ向かう途中、ここ隅田の地まで来て隅田川を渡ろうとした。対岸の武蔵の国石

浜は江戸氏の支配下にあり、住田宿（隅田宿）で足止めをくつたという史実が『吾妻鏡』（鎌倉幕府の記録）に記述されている。住田宿の跡は今の隅田・寺島あたりであることは定説になっている。頼朝の軍勢が下総国府の市川から墨田の地にやって来たとすれば当時の官道である「古代東海道」・「下総街道」を使ったことは確かである。「古代東海道・下総街道」といっても当時の市川から墨田への詳細な道筋は今一つはつきりしていないが、古地図に記載された道などを参照して推論すると、小岩、奥戸、立石、四ツ木を経て、隅田宿まで来たのではないかと推測されている。この道筋は今でも大きな地図で市川国府台から隅田宿のあった隅田川神社の間を俯瞰するような形で見ると、江戸川区、葛飾区、墨田区を含む旧南葛飾郡に一筋の道が一直線に延びているのでわかる。古代官道は直線道が特徴であるので、隅田宿は東海道で下総を経て、隅田川を渡り武蔵、陸奥奥州へと続く古代重要な渡船場であったことは間違いない事実であるようだ。古代・中世にあつては「宿」と呼ぶのは人家が集積し、商家・寺院もある都市的空間を意味すると言ふ。

この道はいま荒川放水路によって区切られてしまった。墨田区内でも葛飾、江戸川両区でも今も使われている生きた道であり現役として働いている。墨田区では荒川放水路西岸の土手・ほがらが保育園から墨田四丁目東電変電所の前を通り、東武線鐘ヶ淵の踏切上で鐘ヶ淵通りと斜めに交差しながら越え、交番の脇を通り過ぎ墨田二丁目の交差点を越え郵便局の前を通り墨

堤通りへ至る道である。白鬚防災団地が出来る前は、墨堤から隅田川神社へ至る水神道が延びていた。いまその跡地を示す印として防災団地墨堤の植込みの中に「隅田川神社参道蹟」の碑が立っている。頼朝の軍勢は陣を建て直すためにこの地でしばらく滞在せざるを得なかったというから、当時の隅田宿（今の隅田・寺島）あたりは源氏の大軍勢で溢れかえっていたことだろう。……などと想像することは本当に楽しい。

（古代東海道にはふさわしい言い伝えがここ墨田の地元に残っているので紹介したい。「頼朝の落馬橋」という話が、東電変電所の近くで燃料店を営む能登屋商店（片田）さんでも代々語り継がれてきた。墨田四丁目1番と同2番の間に細い路地がある。その路地は今鐘ヶ淵駅構内の線路で切られているが、延長線上の向こう側墨田五丁目には古い道が通じている。そこには古くは溝川が流れていたらしく、古代東海道の側溝に合流する地点で橋が架けられていた。それが「頼朝の落馬橋」であると言う。本当に頼朝が落馬したのか、その真偽については別としても何かゆかりを感じさせる話ではある。）

その他、鎌倉から水戸へ至る「鎌倉街道下ノ道」、日光へ行く「鎌倉街道下ノ道から中ノ道への接続道」、「曳舟川沿いの四ツ木道（水戸裏街道）」、平井薬師への宗教道の「平井道」、地藏坂通り、鳩の街の古川道など、向島地区には古い道が残っている。明治時代までは街道或いは幹線道路と言ってもよい道が…。

途中省略

本編はダウンロード時間短縮のため省略版でお届けしています。
途中省略なしの完全版をご希望の方は製品版をご「購読」ください。

●著者プロフィール

鈴木 都宣 (すずき くによし)

昭和4年(1929)東京都向島区寺島町(現・東向島)に生まれる。

昭和28年(1953)英語科教員として東京都に奉職、平成元年(1989)退職する。現在、妻の日本そば店経営に協力している。

平成6年(1994)頃より郷土史に関心をもち始める。

平成9年(1997)江戸開府以来四代にわたり下総葛飾郡寺島村など四村を知行し名勝向島百花園の地に陣屋敷をもった遠き祖先、旗本家多賀氏について調べた『寺島村ゆかりの旗本家「多賀氏を探る」』(下町タイムズ社)を出版する。

湊東向島の道

2004年4月15日 電子出版発行

著者 鈴木 都宣

発行者 瓜谷 綱延

発行所 株式会社文芸社

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-10-1

電話 03-5369-3060 (編集)

03-5369-2299 (販売)

<http://www.boon-gate.com>

© Suzuki Kuniyoshi 2004 Corded in Japan

ISBN4-88737-751-7 C0021

(文芸社発行の通常書籍(紙の本)については、全国書店でお尋ねいただくか、「文芸社ON-LINE」サイト、<http://www.bungeisha.co.jp>を御参照ください。)